

コラム
Column

“日本のバイオテクノロジー”シリーズ第6回 「リベラルアーツがなぜ今必要なのか」

執筆者紹介

近藤 誠一 こんどう せいいち

【経歴等】

1946年神奈川県生まれ。1971年東京大学教養学部卒業。1972年外務省入省。1999年OECD(経済協力開発機構)事務次長。2006年ユネスコ日本政府代表部特命全権大使、2008年駐デンマーク特命全権大使を経て2010～2013年文化庁長官。現在国際ファッション専門職大学学長、(公財)横浜市芸術文化振興財団理事長、(一社)人文知応援フォーラム共同代表、至善館リベラルアーツセンター共同代表等。主な著書:「近藤誠一全集」I, II, III, VI かまくら春秋社等多数。



“日本のバイオテクノロジー”シリーズでは、日本の伝統と文化に関する寄稿をシリーズでお届けしています。第6回となる今回は、外交官として長年にわたり日本の文化外交の最前線で活躍され、文化庁長官を務められた近藤誠一氏に、科学が発達した現代において、なぜリベラルアーツが必要なのかについて執筆いただきました。

「リベラルアーツ」という概念は、大学で専門学部に進む前の最初の2年間で学ぶ一般教養のことを指す言葉として使われていました。それが最近、学問の専門化や、AI(人工知能)などの高度なテクノロジーが生活に浸透している中で、改めて注目されるようになっていきます。リベラルアーツは狭くて深い専門知識や技能を、ものごとの全体を俯瞰しながら人間にとって有意義に使いこなす上で重要であると思われるからです。それは仕事においても、日常生活においても、人間らしい人生を過ごす上で身につけておくべきものと評価されるようになっていきます。

ではリベラルアーツとはそもそも何なのでしょう。

それは古代ギリシャに始まり、中世ヨーロッパの大学で広く語られるようになった概念です。奴隷制度が当たり前であった当時の社会で、人間が「自由人」として生きていく上で身につけるべき学問として提起され、「自由七科」と呼ばれた分野がその代表とされました。文法、弁証法、修辞学、算術、幾何学、天文学そして音楽です。

今このリベラルアーツを語るに際し重要なことは、どの学問を学ぶかではなく、外部からのいかなる束

縛も排して、特定の専門知識に振り回されずに自由にものを考え、行動するという姿勢を貫くことだと思います。奴隷制はなく、何でも自由に学べる現代において、なぜ今さらリベラルアーツなのかと疑問に思うかもしれません。

しかし着目しなければならないのは、今のわれわれは自由なようで、実は「固定観念」によって立派に「奴隷」にされているということです。その代表が、経済は成長しなければならない、科学技術は万能だから、その過程で生じるどんな問題も、いずれは解決してくれるという思い上がりともいえる「楽観論」です。また競争に勝つためには効率性を高めて短期に成果を出すことが重要で、それを目に見える数字で評価すること、つまりいわゆるコスパやタイプが最重要な基準だという「思い込み」です。そしてその奥には、西欧の近代合理主義の思想が流れています。

科学技術や経済成長が文明の達成に大きな貢献をしたことは事実です。しかしそれゆえに人間は地球の覇者だという「思い上がり」をもってしまったのではないのでしょうか。それが、深刻さを増す温暖化や生態系の破壊を生んできたばかりか、人間社会の格差と

分断を生み、戦争による大惨禍の可能性を眼前に広げているのは明らかです。それでもなお、自慢の科学技術をもってしてもその抜本的解決ができず、「その場しのぎ」の対応で済ませて事態の悪化から目を背けているのです。

リベラルアーツは、現代人が陥っているこうした「思い上がり」を排し、長期的にとるべき政策を考えて実行する「自由」を取り戻す上で有益なヒントを与えてくれます。それは自然科学、社会科学、人文学などの分析の成果だけでなく、古典や歴史、文化芸術が語るものなど人間が長きにわたって蓄積してきた知的活動です。

ひとりの人間がすべての分野の専門知識を把握することは不可能です。しかしひとつの専門分野の知識を深めつつ、古典や歴史、文化芸術に親しみ、他の分野の専門家との自由な横の「対話」をすることが、思わぬひらめきやヒントを与えてくれます。

『聖書』は、人類が「禁断の実」を食べて獲得した科学技術をうまく使いこなせていないことが、自然との乖離つまり「楽園追放」を引き起こしていることを反

省する気持ちを与えてくれます。『バベルの塔』は、人間の「思い上がり」を戒める話です。『方丈記』の有名な冒頭の一文は、まだ科学が解明できていない生命の本質についています(注)。

どんなに忙しくとも、常に専門外の事象に好奇心をもち、他の専門家と対話し、古典や歴史に親しみ、趣味を嗜み、自然と交わる機会をつくることで、リベラルアーツの力が自然に個人に、そして社会に活かされるようになるでしょう。

(注)「ゆく河の流れは絶えずして、しかももとの水にあらず。よどみに浮かぶうたかたは、かつ消えかつ結びて、久しくとどまりたるためしなし。世中にある人と栖と、又かくのごとし」
『方丈記』 鴨長明(岩波文庫)



人間の墮落のあるエデンの園



バベルの塔